歯学部・歯学研究院

Ⅰ　研究の水準 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 研究 7-2

Ⅱ　質の向上度 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 研究 7-4

Ⅰ　研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

〔判定〕　期待される水準にある

〔判断理由〕

観点１－１「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

○　原著論文（査読あり）の発表数の年度平均は、第１期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の 102 件から第２期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）の 118 件となっている。

○　科学研究費助成事業の採択状況は、平成 22 年度の 59 件（約 1 億 5,500 万円）から 83 件（約２億 2,700 万円）となっている。

○　科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業、研究成果最適展開支援プログラム、戦略的イノベーション創出推進プログラムに継続して採択されている。

以上の状況等及び歯学部・歯学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

〔判定〕　期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点２－１「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

○　学術面では、特に機能系基礎歯科学の細目において卓越した研究成果がある。また、歯科基礎医学会賞をはじめとして、125 件の学術賞を受賞している。

○　卓越した研究業績として、機能系基礎歯科学の「味覚情報の受容、伝達、調節機構の解明」の研究があり、末梢における受容・情報伝達機構、ホルモン等による味覚情報の調節機構、味細胞から味神経への情報伝達機構等を明らかにし、研究成果が国際的な学術誌において重要論文として取り上げられている。

○　社会、経済、文化面では、特に機能系基礎歯科学、社会系歯学の細目において特徴的な研究成果がある。

○　特徴的な研究業績として、機能系基礎歯科学の「脳炎症の慢性化におけるカテプシン群の役割に関する研究」、社会系歯学の「科学的根拠に基づく口腔健康管理の客観的評価の確立を目指す研究」がある。

以上の状況等及び歯学部・歯学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、歯学部・歯学研究院の専任教員数は 76 名、提出された研究業績数は 16 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 16 件（延べ 32 件）について判定した結果、「SS」は１割、「Ｓ」は７割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績４件（延べ８件）について判定した結果、「SS」は１割、「Ｓ」は６割となっている。

（※判定の延べ件数とは、１件の研究業績に対して２名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ　質の向上度

１．質の向上度

〔判定〕　質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　脳神経科学の分野で、科学研究費助成事業の基盤研究（S）、特定領域研究や、日本医療研究開発機構の革新的先端研究開発支援事業（AMED-CREST）等に採択されている。また、口腔組織の再生・再建医療研究では「炭酸アパタイト骨置換材の開発」が JST の戦略的イノベーション創出推進プログラム（S-イノベ）に採択されるなど、第２期中期目標期間に年間 1,000 万円以上の大型の外部資金に８件採択されている。

○　集学的研究プロジェクトである「口腔組織の再生・再建医療研究」と「口腔健康科学研究」から派生した口腔健康、脳健康及び全身健康を包括的に科学する研究領域がオリジナル研究として発展しており、平成 27 年度に国民の QOL（Quality of Life）の向上と、健康寿命の延伸に取り組む、オーラルヘルス・ブレインヘルス・トータルヘルス研究センターを設置している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○　機能系基礎歯科学の「味覚情報の受容、伝達、調節機構の解明」に関する研究では、末梢における受容・情報伝達機構、ホルモン等による味覚情報の調節機構、味細胞から味神経への情報伝達機構等を明らかにするなどの研究成果をあげている。

○　機能系歯科学の「脳炎症の慢性化におけるカテプシン群の役割に関する研究」や、社会系歯学の「科学的根拠に基づく口腔健康管理の客観的評価の確立を目指す研究」は、研究成果がマスメディアで報道され、社会的な反響を得ている。

これらに加え、第１期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。